

アースルーリンド の騎士

『幼い頃』



天野 音色

1 レイファスの言い分

その日の夕方、レイファスは馬車の中で数時間揺られ、貴族の中ではそこそこ広い領地内にある屋敷の、榎の木に飾り彫刻の彫られた大きな玄関前で、侍従に数日過ごす為の着替えの詰め込まれたトランクを持たれ、侍従の顔きに顔きで応えた。

かっ！かっ！

来訪を知らせる鉄の輪を二度、背の高い侍従が叩くと、慌ただしい足音と共に召し使いが扉を開けて覗く。

侍従と荷物。

そして...小さなレイファスの姿を見つけた途端、その屋敷の召使いは奥へと飛んで行き、叫んだ。

「奥様！レイファス様がお付きです！」

そしてレイファスはファントレイユの母親、セフィリアの出迎えを受けた。

レイファスの母親は体調を崩して以来、病気がちになり、いいかと思えばまた悪く、療養地で過ごす事が殆どで、幼い彼は屋敷で乳母の手に預けられる事しばしばだった。

父親は彼の母にぞっこんだったので、任務から帰るとレイファスの相手もそこそこに療養地に飛んで行く。だが母親はレイファスを溺愛していて、療養地から帰るとその埋め合わせのように決まって、息子を抱きしめて離さなかった。

...だがとうとうレイファスの母親、アリシャの体調は悪化。

彼女は姉、セフィリアに息子の世話を頼み込んだのだ。

セフィリアは知的な美人で、女性にしては少し背が高かった。

...まあ、レイファスの母親(アリシャ)は随分小柄なので、一般的には大きいとは言い難いだろうが。

セフィリアは五歳になったばかりのレイファスの手を握ると、部屋へと招き入れた。

セフィリアの、心から労る感情が手から伝わり、今度ばかりはレイファスの母親アリシャはもしかして命の危機すら迎えるかも。

そうセフィリアが、心配している様子が解った。

彼女もレイファスと同年の、やはり赤ん坊の頃体の弱かった息子ファントレイユで、随分心を痛めたので。

幼く心から愛している息子を残してこの世を去る事になったらとても辛いだろうと、彼ら親子に心を寄せている様子に、レイファスは何も言えなかった。

部屋の戸口から、ファントレイユが姿を現した。

母親から事情を聞いているのか、いつも人形のように大人しい彼はやはりとても静かに、心配そうな表情を浮かべてレイファスを迎え入れた。

レイファスは顔を上げて、頷いてみせた。

ファントレイユはあどけないピンクの唇を、ほんの少し開いた。

少女のような容姿だと、余所の人には言われていたが、レイファスはそうは思わなかった。

あまり感情を出さないファントレイユは性別を超えて、とても綺麗な人形のように見えた。

自分のくっきりとした青紫の瞳や、明るい色のはっきりとした鮮やかな栗毛と違って、本当に淡い色のブルーの瞳で、髪の色も淡い栗色にグレーがかかっていて、ファントレイユがすました顔なんてするとその淡い色の髪や瞳の印象で人間離れして見え、どこか人外の者のように神秘めいて見えた。

ファントレイユはいつも決まって、母親の前でそれは大人しかった。

その時もセフィリアが気遣う言葉を投げかけている間、じっとしていた。

知ってる癖に...

レイファスは軽くファントレイユを睨んで思ったが、彼が母親を遮る事は無さそうだったのでレイファスは少し、あくびをかみ殺す様子を、して見せた。

途端、セフィリアの言葉の内容が変わる。

「...とても、疲れているのね？」

レイファスは頷き、言った。

「いつもみたいにファントレイユの部屋に行って、いい？」

セフィリアは小さなレイファスに屈んだ。

「...でも今度は長く泊まるから、貴方の部屋を用意させたのよ？」

だがレイファスは聞く気は無かった。

とても悲しそうな顔をして、つぶやく。

「でも僕、この屋敷ではファントレイユの部屋が一番落ち着くんだ」

セフィリアは直ぐに折れた。

そのいたいけな、病気の母親と離れて心細い気の毒な少年の気持ちを、気遣ったのだ。

「...いいわ。

ファントレイユと一緒にいらっしやい。

後で夜食を届けさせるから」

レイファスは頷いた。

一刻も早くこの息詰まる気遣いから解放されたくて、自分の部屋に促すファントレイユの後に付いて行った。

部屋に入るなりファントレイユはやはり気遣う様子を見せ、レイファスはつい胸の内を晒した。

「よしてくれ。

君の母親がそれは大事だと大袈裟に君に言って、君は母親のいい子ちゃんだから同じように僕に同情してるんだろうけど」

あんな風に気遣われるなんてうんざりだという顔を、でもファントレイユは強がりなのかどうか、気遣う表情を崩さず伺ったので、レイファスは続けた。

「家の乳母と対決しなくて良くなったと思ったら、今度はセフィリアだ。

君が唯一の息抜きなのに。

味方になってくれないのか？」

ピンクがかった肌に赤い唇をして、くっきりとした青紫の瞳も、鮮やかな栗毛もそれは綺麗でとても可愛らしいレイファスの唇からそれが漏れても、ファントレイユはまだ少し、眉を寄せて心配げだった。

レイファスはとうとう、タメ息を付いた。

「...アリシャは親父が面倒見てるし、僕は僕の面倒を見なくっちゃいけない。

セフィリアと来たら、女の子と君を絶対！間違えてる。

僕の所のアリシャもそうだけど、セフィリア程管理がきつくないぞ！」

ファントレイユはようやく、ほっとした表情を見せた。

「だって...彼女は僕が、噴水を浴びただけでも熱を出すと思ってる」

レイファスはさっさと寝台に座ると、ファントレイユも横に座った。

レイファスはファントレイユの、真っ白な肌のとても綺麗な横顔を眺めて肩をすくめた。

三歳の夏の事だった。

やっぱりここに母親アリシャと遊びに来ていて、暑かったしファントレイユに水浴びしようと誘った。

庭の中央の噴水が盛大に水を、吹き出していたので。

レイファスはさっさと服を脱いで水に浸かるが、ファントレイユと来たら、ぐずってた。

で、ついレイファスはファントレイユの腕を掴んで、引っ張り込んだ。

ファントレイユは服每ず濡れになって、その後、仕返しに水をかけてきたからその仕返しを、した。

が直ぐにセフィリアが飛んできてファントレイユを連れ去り、着替えさせて髪を必死で、拭いていた。

「真夏なのに」

レイファスがぼそりと言うと、ファントレイユも肩をすくめる。

「でもセフィリアは僕が熱を出したらと、それは必死だったんだ」

自分もそうだったが、ファントレイユも領地の外には絶対、出して貰えなかった。

遊び相手は領地に居る使用人かその子供達で、皆主人の子息に対する態度を叩き込まれていたし、絶対危ない遊びは禁止

。汚い言葉遣いも不潔な事も、ダメだった。

最もレイファスの方は母親がしょっちゅう療養所に行くので、目を盗んでは屋敷の使用人達の暮らす小さな村へと遊びに出ている。

ダメだと言われた事は片っ端からし、村の大人や子供達にも堅く口止めするのを忘れなかった。レイファスの母親は息子に甘かったし、レイファスが甘えた口調で優しくすると、大抵のお咎めからは逃れられた。唯一レイファスの裏表のある性格を知り尽くし、猫なで声に通じない相手は、乳母だった。乳母は母親が病気がちで甘やかし放題の我が儘息子に、母親の留守中、敢然と立ち向かった。夕食が気に入らないと食べないと、その後の全部の食事を抜いた。壊れたおもちゃの代わりに欲しいと言うと、壊したのは誰かを問われ、物は大事にするものだ、レイファスが代わりのおもちゃを欲しがらなくなる迄言い続ける。

常にレイファスと乳母の行き詰まる対決で、使用人達はその事を知っていて、レイファスがいかに彼女の裏をかくか。言いくるめるかに日夜知恵を捻るのを、目撃していた。

今度は長くなりそうだと肩を落として父親が話し、レイファスはファントレイユの屋敷に行く荷造りをし、屋敷を出る際見送る乳母に、舌を出してやった。だが乳母の瞳は、こう言っていた。

“セフィリアは私同様、それは手強い相手ですからね”
でも、それは確かにそうだった。
ファントレイユを見ていれば、良く解る。
セフィリアは大人しく、いつも清潔で馬鹿騒ぎをせず、お行儀のいい自分の一人息子が大層自慢だったのだ。

だがレイファスにとって唯一の救いは、セフィリアがレイファスの裏表を知らず、猫なで声が通用する点だ。しかもその母親で彼女の妹アリシャは、重態だった。

ファントレイユもセフィリアもそれは心配していたが、レイファスにはどうしてもアリシャが亡くなるイメージが無かった。
多分今年の冬がうんと寒くて療養地に出向けば良かったのに、最近元気だからと無理にこの地に留まったせいだと、解っていた。
しかも、レイファスの親父は可愛らしく可憐なアリシャに夢中だったから、妻の具合が少しでも悪いとそれは大袈裟に騒ぎ立てる。

...確かに、いつもよりは青い顔をしていてひどく弱ってはいた気もするが、アリシャが療養地に出かける時、別離の予感はしなかった。

...レイファスは大好きな毛皮の騎士、愛犬のローダーを、四歳の時亡くしていた。
ローダーは小さなレイファスよりうんと大きく、利口で優しく、いつも甘えさせてくれたレイファスの一番の親友だった。

が、レイファスより年輩のその犬はもう年を取っていて、とうとうレイファスが四歳の冬、母親が療養地に出かけている

間に、亡くなってしまった。

ローダーの側を離れて自分の寝台に戻る時、その優しかった犬は茶色の、とても暖かい瞳でレイファスを見つめた。幼いレイファスはその意味が、解らなかった。

明け方だった。

どうしても寝付かれずローダーを覗いたが、ローダーは冷たくなっていた。

レイファスは泣き続け、ローダーの側を離れなかったから、屋敷の執事は慌ててセフィリアとファントレイユを呼んだ。ファントレイユが彼の側に来てようやく、レイファスはローダーを離れた。

ファントレイユに抱きついて泣き続け、セフィリアに命あるものは必ず終わりを迎えるんだと諭され、でもレイファスの感情は納まる事無く、冷たくなったローダーの事が悲しくて、代わりに暖かい、ファントレイユの体に抱きついて泣き続けた。

半日それを続けたと言うのに、ファントレイユときたら付き合った。

日頃、母親の厳しい管理で自分を抑えるのに馴れているのか、単にお人好しなのかはレイファスにはその時、解らなかったが。

ファントレイユがいつ迄たっても、疲れただとかお腹が減っただとか、いい加減にしろ！と言い出さなくてようやく、レイファスは顔を上げてファントレイユを見た。

ファントレイユはその人形のような綺麗な顔を傾けて、ほっとしたように見つめて来るものだから、もしかてファントレイユはとても男の子で、自分が女の子のような顔立ちだから、庇い、大事にする相手と勘違いしてないか。と思う程だった。

事実領地の遊び相手の、とても利発な少年の小さな妹に、花を摘んでやったり、転びそうになると慌てて助けたりする時はちゃんと、人形で無く男の子に見えた。

幼い彼女がファントレイユに構われて笑顔になると、ファントレイユは途端、それは誇らしげな微笑みを浮かべていた。

だからその時だってファントレイユも小さかったと言うのに、レイファスが泣き続ける間じっと我慢して、顔を上げる迄付き合ってくれた。

レイファスの方から聞こうとしたが、ファントレイユが先に言ったのだ。

「お腹が、減ってない？」

とても優しい、表情を向けて。

...レイファスはこの後暫く思案した。

彼は二通りの付き合いをしていた。

一つは地を出して、共犯者にする付き合い。

もう一つは演技し倒して、甘えて自分の我が儘を、通す付き合い。

折角、ファントレイユから少女のように思われてるなら、彼に甘えてやれば自分の意見は全部、通るはずだ。

しかしファントレイユはとても利口で、レイファスのとんでもないやり様に薄々気づいてるし、いい子のふりだけする、

やりたい放題のやんちゃ坊主だと言う事がバレるのも時間の問題だろう。

それでレイファスは惜しいとは思ったが、ファントレイユを共犯者にする付き合い相手に、切り替えたのだった。

レイファスはそれ以来、ファントレイユには本音をブチまけるようにした。

ファントレイユは最初、目を丸くしていたようだが、レイファスの地の性格が実は、見かけ道理のお行儀のいい可愛い子ちゃんで無く、いたずらも愉快的事も暴れ回るのも大好きな、普通の手には負えない悪戯鬼だと言う事を、解らせる事に成功した。

「よく、息がつかまらないな？」

お人形のような彼にそう言うとファントレイユは返した。

「...よく、ころっと変わるな？」

レイファスは思い切り、肩をすくめた。

「お行儀、お行儀、お行儀！」

なんだって女親ってお行儀にこだわるんだろう？

僕は女の子じゃ無いんだぞ？

だいたい男の子ばっかの間で大人しく、可愛らしくなんてやってられるか？

誰が一番高く迄木に登れるとか、誰が猛犬の目を盗んでりんごをたくさん盗むだとか。

そっちの方がうんと重要なのに！」

レイファスの言い切りに、ファントレイユは目を丸くした。

「りんごを盗むの？」

「.....ああ...」

君は言いつけ通り、領地から出たりはしないんだっけ？」

「言いつけに、そむいてるの？」

レイファスは目を、丸くした。

「...言いつけ通りにずっと、従ってるの？」

「...だって、言いつけは守るものだろう？」

「...言いつけなんて大人の都合を子供に押しつけてるだけだから、普通の子供は破るのが当たり前だ」

ファントレイユは暫く俯いて、考え込んだ。

「君、お人形みたいだと思ってたけど、本当にセフィリアのお人形なんだな？」

そう言ってやると、ファントレイユが顔を上げた。

レイファスより少し、大柄だった。

ファントレイユのとても綺麗な顔立ちを覆う、ふんわり柔らかな淡い色の髪が肩の上で、揺れた。

「...僕が、人形みたい？ どうして？」

レイファスはファントレイユの腕を掴むと、大鏡の前へ連れていった。

小柄な自分よりも幾分背の高い、淡い色の髪をしてクリーム色の衣服のとても栄える、それは綺麗なファントレイユの姿がそこに、映っていた。

「...自分を見て、そう思わない？」

ファントレイユは自分の姿を眺めたものの、まだ腑に落ちないようだった。

それでレイファスはようやく、セフィリアには彼の母親アリシャのように、綺麗な人形が大好きで、集めて飾って眺める趣味が無い事に気づいた。

「...君の屋敷に人形は、無かったな.....」

ファントレイユは頷いた。

「...あんなものより腕のいい画家の絵を飾るべきだし、その方が絶対心が潤うってセフィリアは言っていた」

ファントレイユが言うので、レイファスは頷いた。

「君のお母さんは文学少女で、少女趣味は無いもんな」

「君は、随分色々な言葉を知ってるんだな？」

「家庭教師が色々な事を話してくれるし。

彼は大抵僕の話聞いてくれて、それについての意見を言ってくれる。

絶対自分の考えを押しついたりせず、必ずどう思う？って。

僕の意見をちゃんと聞いてくれるんだ。

凄く、ほっとする。

でも女は駄目だ。

人の話なんてそこそこで、すぐ自分のやり方を押しつけてくる。

心配だとか怪我をするからとか言って」

「...でも、心配かけると辛い？」

とても悲しそうで一生懸命な姿を、見たりすると」

「セフィリアは熱を出した君もいつも、看病していたからそう思うの？」

ファントレイユは、大人しく頷いた。

「...元気になるといつも、ほっとしたみたいに力一杯、抱きしめてくるから、心配かけないようにしたいんだ」

レイファスは母親想いのファントレイユは随分見た目と違って、ちゃんと男の子なんだ。とは思ったが、言った。

「気持ちは解るけど。

男の子としてちゃんとこの先、やっていけるようになる事が一番、親孝行だと思うな」

「親孝行？」

「セフィリアの心配じゃないって事！

君だって、軍教練校に入校する気なんだろう？

あそこは男ばっかだし、騎士志願者なんて洗練されている者なんてほんのわずかで、乱暴者ばっかだって。

僕もそうだけど、君もあんまり体の大きな方じゃないし。

うんと剣の腕を磨くか、相手を言いくるめるか。

ともかく殴られないよう身を護れなきゃ、学校を自分から、止めなきゃならなくなるしそれは凄く、不名誉な事だと思う

」

「不名誉？」

「みっともないって事さ！」

そう言った時、ファントレイユは青くなった。

どうやら彼は、みっとも無いのは嫌いらしい。

2 ファントレイユの言い分

ファントレイユは、レイファスを見た。

自分が散々セフィリアに心配をかけてきていたので、レイファスもさぞアリシャの事が心配だろうと思ったけど、違ふようだった。

ファントレイユはローダーの時、あの気かん気で気の強いレイファスが半日泣き続けたのを目撃して以来、彼を気遣う癖がついてしまった。

レイファスときたら初めて逢った時絶対！女の子だと思う程可愛らしくて可憐だったのに、二人きりになるとてんで悪戯鬼だった。

母親達が集い、そのいかにもお上品そうな彼女達の友達がやって来るともう、レイファスの苛立ちは頂点だ。大抵彼女達の前に引き出され、見せびらかされ、付き合わされる。

レイファスは本当に女の子でも滅多に居ないくらいそれは可愛らしい顔立ちで、彼に微笑んだりされると大抵の相手はその愛らしさについ、顔がほころぶようだった。

それがアリシャの自慢で、彼女達はその可愛らしさにやはり、夢中になる。

でも、当の本人は.....。

可愛らしく微笑んで目当てのお菓子を貰うと、次にしたのは召使いの隙をどこで突くかで、召使いがお茶を配る時を狙い、こっそりと固くなったパン屑を投げて注意を引く。

上手くやれると召使いはそのお茶を、やって来た気取ったご婦人の、胸の上に落とすのだ。

召使いにお茶をかけられ大騒ぎになる様子を、レイファスはその愛らしい顔でそれは愉快そうに笑ってみせ、ファントレイユは幾度もそれを目撃してきた。

最初はびっくりしたけれど、だんだん馴れてきた。

レイファスは決まって、その騒ぎの後に

「外に遊びに、行きたいんだけど」

と母親の腕にまとわりつくように身を寄せて、可愛らしく甘える。

母親は騒ぎに気を取られ、愛らしい息子に大抵色好い返答をするが

「危ない事はしないのよ。遠くに、行かないでね」

と釘を差すのを忘れなかった。

...レイファスはその言いつけを、守った試しなんか無かったが。

ファントレイユの家の領地の外れぎりぎり迄遠出して、立派な背の高い門に阻まれても、その隣に立つ大木に登ろうと言い出す。

ファントレイユはこの大木はいつも、園丁に見張られていると告げたがレイファスは登り始める。

やっぱり園丁のトレッドが飛んでくるが、レイファスは枝に捕まったまま、自分の大切なレースのハンカチが、風に飛んで枝に引っかかったのだ。と可愛らしい顔を歪め、嘔泣きをした。

木の下でファントレイユはそれは呆れていたが、トレッドは自分が何とかします。と木に登り、上で枝に掴まる愛らしい少年を抱きしめては下に降ろし、今度は自分が、レイファスの捕まっていた枝迄登るのである。

「この辺りですか？」

「もっと、上」

レイファスが言うのを聞いて、ファントレイユは小声で尋ねた。

「だって、レースのハンカチなんて、引っかかってないのに」

レイファスは艶然と笑うと、そっとファントレイユの手を引いてその場から逃げ出した。

トレッドを放って。

ファントレイユはレイファスが、何喰わぬ顔で屋敷に戻り、正直者のトレッドがすまなそうな顔で、ハンカチは見つからなかった。と母親達の居る場に報告に来るのを聞いて、それはがっかりした様子で肩を落として見せるのに、更に呆れた。

そしてあろう事か、ありもしないハンカチを無くしたトレッドに

「一生懸命探してくれて、ありがとう」

とそれはしょんぼりして、告げるのである。

場の同情が一斉にレイファスに集まる様子に、ファントレイユはもう何も言えなくなっていた。

夜、一緒に寝台に潜り込む彼に尋ねる。

「みんなを騙して、楽しいの？」

レイファスはファントレイユを、ちらと見たがつぶやいた。

「...木に登るのを邪魔したり、その外へ出てはいけないなんて禁止したりする相手にどうして手加減しなきゃいけないんだ？」

本人はでも、自分の抗議は随分と甘いし、面と向かって戦いを挑んだりしなかったし、相手を傷つけてもいない。と言いたいようだった。

勿論、レイファスのやり方はその場を丸く収めたし、木に登った咎めも無く、ありもしないハンカチを無くしたトレッドも、責めを負わなかった。

ファントレイユはため息を付いた。

が、ファントレイユはレイファスが自分のしたい事を阻む相手に容赦無く、この可愛らしさを武器にし騙し倒す様子を、この後ことごとく目撃する羽目になるのである。

その内、母親の友達達が自分の息子らを伴って訪れるようになって以来、二人はますます居心地が悪くなっていた。

彼女達の息子らはそれは容姿の綺麗な二人が、母親達に大層受けがいい事に嫉妬した。彼らの時には再三もお菓子が欲しい。とねだっても許可しなかったのに、レイファスが可愛らしくお願いすると途端、許されたりするのに不満を持っていた。

それで子供達だけになった時、ひどい嫌がらせをした。泥の入った飲み物を、飲ませようとした時なんかレイファスは怒りもせずにそれを受け取って口に運んでみせる。

彼らはそれを飲んだレイファスを笑い物にしたかったようだが、レイファスは飲み込む直前、それを彼らの衣服に向かって引っ掛け、ファントレイユの腕をさっと掴んで駆け出した。

連中は、追って来たが、レイファスは安全圏。つまり母親達の群に、逃げ切った。

どたどたと、血相を変えて追いかけてくる野蛮でやんちゃそうなその息子達は母親から見ると眉を潜める存在で、追いかけられたレイファスとファントレイユの上品で可愛い姿はそれは可哀想に見え、彼らに味方して野蛮な追っ手に厳しく注意、してくれたりしたから、息子達は二人をもっと、嫌いになった。

「...だって、レイファスが僕の服に、飲み物をかけたんだ！」

彼らの抗議に対してファントレイユは『その飲み物に泥を入れたろう？』と糾弾しようとしたが、レイファスは、彼の服を掴んで止めた。

母親達がレイファスを見るとレイファスは途端、瞳を涙で潤ませ、つぶやく。「...手が、すべったのに許してくれないんだ...」

やっぱり、場の同情はレイファスに一斉に集まった。

母親は乱暴な息子達に、レイファスのした事を許せない、心の狭い子供だ。と彼らに言ったし、その上レイファスが投げて床に散った飲み物の後始末を彼らに命じたりしたからもう、彼らの怒りは頂点だった。

「...どうして本当の事を、言わないんだい？」ファントレイユが尋ねると、レイファスは肩をすくめる。

「母親達は優雅な時間を過ごしたいのに、よりによって泥の入った不潔で野蛮な飲み物だどうだに、煩わされたいもんか！」

第一僕が失敗した時、奴らが目くじらたてる。と大人達に示しといた方が、今後いつでもあそこに逃げ込めるじゃないか」

ファントレイユは目を、丸くした。「...じゃあ、あいつらまた嫌がらせをしようと思ってるの？」レイファスは、とても性格のいい領地内の子供としか付き合った事がないファントレイユに、呆れた。

「...ああいう子供は、絶対これからずっとひどい嫌がらせををすると思う。
自分達が僕達より優れていると、僕達に思い知らせる迄」

でも実際その通りだったし、レイファスはいつでも先手を打った。

レイファスがそれはうんざりすると日頃言っていた、二人を猫可愛がりするご婦人達の元へと毎度逃げ込む事に成功し、子供達は二人が、綺麗で大人しくて可愛らしいのに大層嫉妬して性格が悪い。と、彼女達に思われたのだった。

自分のあまり好きでないご婦人達の好意を使って自分の株を上げる事をどう思ってるのかレイファスに尋ねる時、彼は決まって

「...いつも女の子扱いされてうんざりしてるのに付き合ってるんだ。
これ位は返して貰って当たり前だろう？」
と、駆け引きのようにそう言う。

でもファントレイユは本当の真心とか思いやりとか、愛情は？

とレイファスに聞いたかったが、彼の中では大抵自分のしたいようにさせてくれる相手か、そうでないかが決め手のようだった。

それに現実はどうやら、レイファスの言うとおりでと言う事に気づく。

子供達はレイファスとファントレイユに、がつんと思い知らせ、自分達が上だと、示したいようだったから。

がまだ母親が全世界の支配者の彼らには、可愛らしい容姿を武器にしたレイファスに、勝ち目は無いようだった。

ある日、ご婦人達が新参者を連れて来ていた。

男の子ばかりを持つそのご婦人達が

『男の子が、どれ程手が焼けるか』

という話題に飽きたのかと、レイファスは思ったようだった。

そのご婦人の子供は、女の子だったので。

場の注目は彼女に、集まった。

だって母親達は皆、女の子が欲しいと思っていたから。

彼女は母親達に取り囲まれてちやほやされるのに鼻高々だったし、レイファスやファントレイユを

『女の子のまがい物』と

ふんと鼻を鳴らし、得意そうに見返した。

男の子達はいっせいに、レイファスをやり込めたように、にやにや笑って見る。

ファントレイユはそっとレイファスを心配げに見たが、レイファスは冷静だった。

その場には珍しく彼女らの内の一人の、身内の甥が来ていて、若く

て見目が良くて品のいい彼もそれは、皆にちやほやされていた。

レイファスはお菓子のバスケットを持って彼に差し出し、それは可愛らしくにっこりと笑ったし、時折、ファントレイユ

を連れては彼の側で話をねだった。

彼が、可憐なレイファスと人形のように綺麗なファントレイユに圧倒された様子を見せ、実際の女の子よりも容姿は二人がダントツ綺麗だ。と感じている様子がある場に、伝わった。

“輪の中心”だったその子は女の子というだけで、美しいのは二人の方で、女の子なのに男の子に劣る容姿だなんて気の毒に。と言う視線を彼から投げられて、女の子は一瞬、泣きそうな表情をした。

ファントレイユはフェミニストだったから、どんな性格だろうと女の子を泣かせる事に罪悪感を覚えたが、レイファスはその様子を見、男の子達にたっぷり、余裕の微笑を返したのだった。

二人だけになった時、ファントレイユがレイファスの腕を引いて叫ぶ。

「あの子、泣きそうだった！」

「だから？ 奴らの手先だぞ？」

「...でも、女の子なのに！」

「女の子だって、手先だって事が、解らない？」

どっちが重要なんだ！

手先だって事の方が問題だろう？」

ファントレイユはまだ何か、言いたげだった。

「...君だっていい加減気づいたらどうだ？」

母親達がちやほやしてくれているのは、女の子より君が綺麗だからだ。

いわば彼女はライバルなのに」

ファントレイユの胸に、でっかく太っとい、杭が突き刺さった。

レイファスはファントレイユが、人形のような外観に反し中味はとても男の子で、女の子とか小さく弱い相手を庇い、彼らが自分に頼って感謝の視線を向けてくれる事がどれ程嬉しく、ファントレイユにとって誇らしいか知っていた。

きっと子供の頃、いつも熱を出しては母親に庇われていた反動で、自分が今度は庇う立場に立たされるとようやく、一人前になった気分に成れるんだろうな。とは思ったが。

ファントレイユは暫く落ち込んでいたし、それ以来鏡があると決まって自分の姿を眺めては、普通の男の子と比べてそれは綺麗綺麗しい自分の容姿にため息をついて俯いたし、レイファスの家の人形を、しげしげと眺めたりしていた。

つい、そんなファントレイユの様子にレイファスは

「同じ色のドレスを着たら、この人形と君はそっくりだ」

と言うとファントレイユはますます、そのとても綺麗な人形を見て青冷める。

彼は思わずレイファスを見たが、レイファスは意地悪を言うつもりで無く『事実を認めろ』と言う表情を、して見せた。

ファントレイユは領地内の男の子らとみんな友達だったし、母親の友達の息子達とも争う気は無かったが、彼らはやはり、ファントレイユの事を敵扱いした。

ある日、ファントレイユはレイファスが居ない隙に、領地内にある小川のほとりで彼らの姿を見つけた。

いい加減喧嘩せず仲良く遊びたいと平和的にファントレイユは願ったが、彼らはファントレイユを見つけるとひそひそと話し、一人が寄ってきて、あっという間にファントレイユは取り囲まれ、襲いかかられた。

彼らはファントレイユの衣服を脱がし始め、怒鳴る。

「...本当に、男かどうか、調べようぜ！」

そう言って。

でもファントレイユは母親の言いつけで、川で服なんか脱いで、おまけに濡れたりして熱を出したら。という心配が身についていたので、抗った。

が、彼らは余計に乱暴になり、とうとうファントレイユの股間に目的のものを見つけると

「一人前に、ついてるぜ！」

「取って、本物の女の子にしちゃえ！」

と、更に乱暴を働いてくるのに、ファントレイユは焦った。

服を脱がされて体を触られるのが、もの凄く不快だったし。

ファントレイユが四人もの子供に抗いかねて、彼らのしたいように事がどんどん進むのをどう制止しようか、泣きそうになった時、レイファスがすっ飛んで来た。

その時のレイファスを見た事の無い、きつ。とした顔をし、大声で怒鳴る。

「ファントレイユは体が弱いのに！」

川に落ちて熱を出したら死んでしまう！」

あんまり大声で、それに気づいた母親や召使い達が慌てて寄って来た。

ファントレイユは召使いの男に助けられ、男の子達は母親の糾弾を、縮こまって待った。

当然、川に入ろうと誘って、ファントレイユが従わないから衣服を脱がしたんだ。と釈明した。

ファントレイユはそんな風に暴力的な扱いを、今迄一度もされた事が無かったから、彼らがどうしてそんな事がしたいのかすら解らなくて、でもその暴力の不快さに、体をぶるぶる震わせていた。

二人きりになった時、レイファスに礼を言おうと思ったが、レイファスに怒鳴られた。

「敵だと、言ったろう？」

母親達の世界に暴力は無いけど、男の子達の間にははっきりなしにあるんだぞ？

自分が男の子だと思うんなら、がつんとやり返せ！

それとも君は体も大きくないし女の子より綺麗だから、あついらに男の子としては勝てません。と認めるのか?!」

その時ようやくファントレイユはレイファスが今まで何と戦っていたのか、解った。

自分の、誇りを彼は、護っていた。

やり用はともかくとして。

次の時だった。

レイファスはいなかったし、おろおろと彼らの暴力に立ち向かう術の無い奴。と目を付けられ、ファントレイユはまた、森で衣服を剥がされかけた。

今度はファントレイユは、もっと抗った。

が、確かに男の子として、体格は劣っていた。

相手の暴力が止まないのに歯を食いしばるが、相手は三人いた。

じきに上着を剥ぎ取られ、それは泥の中に落とされる。

上着を汚す横着者。といつも母親に思われている彼らは、ファントレイユにも同じ咎めを、味あわそうとしているようだった。

ファントレイユはとうとう殴りかかった。

喧嘩の仕方は森番の息子に教わったが、万一大人の男に拉致されたりする時の為。子供の相手に使うだなんて考えた事も無かったが、彼は殴った。

いくら殴っても効かず、ファントレイユは色々やり用を変える。

その間しこたま殴られたが、とにかく夢中だった。

相手の暴力を、叩きのめす事しか、念頭に無かった。

召使いの一人が悲鳴に振り向き、その乱闘を見た。

慌てて大人達が駆けつけ、レイファスもそれを、見た。

ファントレイユは一人を伸して地に転がし、別の一人に背後から抑えられ、前に居る子供に殴られていた。

その子達はファントレイユより年上で、更に体も大きかった。

が、ファントレイユは後ろから腕を掴む子供を、膝を曲げて思い切り後ろに蹴って吹っ飛ばし、目前の、殴っていた子供に飛びかかる。

召使いが、ファントレイユを引き剥がそうと腕を伸ばすが、大きな召使いの掴むその腕を、肩を振って激しく振り払い、ファントレイユは相手にのし掛かって馬乗りになり、拳を振り殴り続けた。

「ファントレイユ！」

レイファスが怒鳴ったが、彼に聞こえている様子は無い。

相手の子がとうとう泣き顔に顔を歪めて助けを叫び、ようやく大人達は慌ててファントレイユを引き剥がす。

ファントレイユは引き剥がされて荒い息に肩を上下させながらも、まだその子を、きつい瞳で睨み付けていた。

...あんまりのその迫力に、皆が黙り込んだのは言う迄も無い。

その後、大人達の前でどうして喧嘩になったか聞かれても、ファントレイユは一言も口を、利かなかった。

例え相手が

『ファントレイユの方から殴りかかった!』

と言い張っても。

日頃それは大人しいファントレイユが殴りかかるだなんて。と、大人達は首を捻っていたので、レイファスはとうとう口を開いた。

「...ファントレイユが本当に男の子かどうか、ダンテはいつも確かめようとしていた...」

ぼそり。と目立たないように言ったが、大人達はそれで納得がいった様子だった。

が、ファントレイユは三人の子供に怪我をさせた。

と自室謹慎で夕食抜きを言い渡され、レイファスはこっそり彼を、見舞った。

ファントレイユは誰にも自分を触れさせなかったから大人達は知らなかったが、ファントレイユの体は、痣だらけだった。

食事を差し入れ、その痣を見て、レイファスはそっと尋ねる。

「...そんなにいっぱい殴られて、よくやり返せたね？」

前から人形みたいと思ってたけどやっぱり、痛まないんだ」

ファントレイユは顔を上げ、頷いた。

「あの時はどれだけ殴られても、全然痛くなかった」

レイファスは思い切り、ため息を付いた。

今はとても痛む様子の彼を見て、レイファスが薬草を持って来ようとするのに、ファントレイユは気づいた様だった。

大人達に告げられないか、心配げにファントレイユに見つめられて、レイファスは肩をすくめる。

「僕がこっそり盗むのが得意だって、知ってる癖に」

ファントレイユが途端、笑った。

3 一緒に、時間

レイファスはセフィリアの前ではそれはしおらしく、病気の母親が心配な様子を見せていた。

が、朝食後にファントレイユの家庭教師が来て、子供用書齋で書物を一緒に広げ始めると態度が一変する。書物を、教師が読み進める間も与えず、次から次へと新しい言葉に対しての質問を、投げかけるのだ。いつものどかに教師の朗読を聞いていたファントレイユは、心底びっくりした。

教師は時々しどろもどろになって、レイファスの質問に答える。数行読み、また知らない言葉を聞くとレイファスはその使い方を聞き、どんな風に言い回すのかの事例を尋ね、どんな場合に使うと効果的かも尋ねた。

一時間を超える時間の間レイファスは質問し続け、ファントレイユはどうしてレイファスがいつも、大人のように言葉を巧みに言い回すのかその理由が、とても良く解った。

まるで教師とレイファスの、戦いのような時間の後の、お茶を平和な気持ちで迎え、ファントレイユはレイファスに尋ねる。

「いつも、あんな風なの？」
その質問に、レイファスはファントレイユを見た。
「だって、ぼんやりしてると退屈じゃないか。
いつか来た時君が講義を受けてるのを見てたけど。
良くあれで、眠くならないな？」

ファントレイユは、呆れた。
レイファスの世界には安らぎとか、平和にのどかに時間を過ごすやり方は存在しない様だった。

「言葉を覚えるのが、好きみたいだ」
ファントレイユは、レイファスを見た。
およそ書物とか堅い物が似合いそうにない、それは可憐で可愛らしい、女の子のような顔立ちだった。

レイファスは見つめられて尋ねる。
「一人で居る時、本を読んだりしないの？」
立派で格好いい騎士がたくさん出てくる、大人の冒険物とか歴史が大好きだけど、解らない言葉が出て来るとイラつくんだ。
意味が解らないと、せっかくなのにわくわく出来ないだろう？」
「本を、読むの？一人で？」
ファントレイユは本というものは大抵、セフィリアが読んでくれるか、家庭教師の読む物だと思ってた。

レイファスは、ファントレイユのとても綺麗な、人形のような顔をじっ。と見る。
が、ファントレイユにもその時、レイファスが自分をどう思ってるのか解った。

『姿が人形みたいで、頭の中も同様、脳味噌の代わりにおが屑が詰まってるんだ』
...そんな、表情だったから。

ファントレイユは少し、不機嫌になる。

「勉強は、嫌いじゃないけど」
「でも君は人に言われないと、何かをやろうと思わないみたいだ。
自分で、これをしようとか、あれをしようとかは、思わないの？」

ファントレイユはふと、レイファスが尽く人の意見を聞かず、自分のしたい事をどんどん実行する様子に気づいた。

確かに自分は彼に比べると、母セフィリアから

『これをするとても良い』だとか
『こういう事が必要だから覚えるように』だとか。
人に言われた事を、してきたと気づいた。
ファントレイユが言葉に詰まる様子に、レイファスはつぶやいた。
「何が好きで嫌いとか。
これはしたい。あれはしたくないって事なんだけど」
ファントレイユはか細い声で、つぶやいく。
「好きはいっぱい、ある。

嫌いは.....。

薬草を煎じて飲むのは大嫌いだけど
あれを飲まないでセフィリアがとても悲しむんだ」
レイファスは、頷いた。
ファントレイユはきつととても幼い頃からいっぱい我慢して来たに違いない。
それでその我慢が、当たり前になってる。
「したく、ない事は？」
ファントレイユは顔を揺らした。
「じゃ、したい事」
「思い切り、水遊びしたい」
レイファスは全開で笑った。

領地の外れの小川で、レイファスもファントレイユも素っ裸ではしゃぎ回った。
ファントレイユは幾度もレイファスに水を掛けたし。

浅いと言っても彼らは五歳だったから、水に浮かぶ事も出来た。
浮いていると青空がとても、綺麗だった。
木々の葉の間から、きらきらと陽光が煌めく。
風がさやさやと吹き渡る。
水は冷んやりと、体に染み渡る。

「気持ちいいだろ？」

レイファスが言うと、ファントレイユが返事した。
「とても」
レイファスはファントレイユを、見た。

あれをしちゃ駄目だとかを、全部聞いていたりしたら、こういう気持ち良さとか楽しいとか、わくわくした事を全部、諦めてるようなものだと言った言葉が、身に滲みて解った様子だった。

髪と体を乾かす為、木にも登った。

「……………わぁ……………」
ファントレイユの声に、レイファスが振り向いた。

「見晴らしが、いいだろう？」

風を受けて濡れた髪をなびかせ、ファントレイユは日頃見ていたものが足下に小さく見える、どこまでも広がる景色に頬を、紅潮させ頷いた。

ようやく人形に見えないそのファントレイユの姿に、レイファスはそれは、安心したようだった。